

3V チュニジアへの旅

その2

JA3USA 島本 正敬



3日目 (前月号から続く)

Ashが管理・運用するクラブステーションで3V8SSを運用するように勧められたのですが、翌月にTL8TTで嫌というほど無線をしなければならぬこともありましてので、今回は見学だけさせて頂いて後になりました。

次に向かったのはスース (Sousse) の旧市街。昔は都市が城壁で囲まれていたのですが、後世になり都市がその城壁の外にも拡張されていったため、都市の中央部に城壁に囲まれた旧市街地 (メディナと呼ばれる) が残り、今も古い城壁の内側には、昔の建物や街路が残っています。その中の道の多くは幅も狭く人が行き来するだけの規模しかなく、今は旧市街地全体にいろいろな店や市場、レストラン等が所狭しと並んでいます。今回訪れたチュニス (Tunis)、スース、スファックス (Sfax) の3都市のいずれにも同じような旧市街があります。どの都市の旧市街地も歩き回りましたが、スースではAshがガイドをしてくれたため、いろいろな質問をしながら長時間過ごしたので、この旧市街地の様子をご紹介します。



Tunisでは旧市街地の中の通りの殆どは道幅2mあまり程度しかありませんでしたが、スースの道幅は大分広がっています。どこも、その両側にいろいろな店舗がぎっしり入っていて、活気のある場所です。日用品、道具、衣類等、何でもあります。食料品は市場のような場所に集中して、肉、野菜、魚、くだもの等と商品別に分かれています。見かける観光客も少なくありませんが、殆どは生活品を求める地元消費者です。沢山の人がごった返して、まっすぐ歩くのも大変なところもいっぱいあります。生活用具、食料品、何を売っている店を覗いても、見慣れたものとは違うものが殆ど。文化の違いがはっきりと判ります。肉の店先に牛の頭がぶら下がっていたり、羊の頭が並んでいたりと、驚か



されるものも少なくありません。魚の種類も異なり、直訳すると「海の犬」と言う名の魚はどう見ても小型のサメ。香料やナッツの店を覗いていたら、店のおじさんに勧められ帽子をかぶって店先のおじさんとして写真を撮って貰ったりしたりと、どの店の人も非常に暖かい感じを受けました。3都市の中で、スースの旧市街地が最も売られている品種も多く、チュニジアの人々の生活を垣間見ることができたように思います。



スースの旧市街地は8世紀に建てられたものですが、その中で最古の建物としてリバトがあります。これは町を外敵から守るための要塞として存在しました。その中に塔があり、一人がやっと歩けるほどの狭い階段を地上38mの高さから町を一望することができます。リバトの塔から降りようとしたとき、狭い階段の中で若い男女のグループと苦労してすれ違いました。後ほど塔の下で彼等の数人と話をしたのですが、誰もが上手な英語で彼等がチュニジアの高校生で他の町から来ていることを知りました。明るく感じの良い若者達でそのうち一人は日本に来たくて日本語も含めいろいろ勉強していると言っていました。後でAshから、彼らはチュニジアでも最も優秀とされる高校の学生だと聞きました。アラブ語やフランス語は生活語。その上、英語があつて、あれだけ話せるのは大変な驚きでした。旧市街地を離れ、遅い昼食をイタリア・レストランで頂きました。やはり近いだけあってイタリア料理店やピザの店をチュニジア中で見かけます。食後は、あちこちへ連れて行ってくれました。Ashが数年住んだというだけあって、町の様子を本当に良く知っています。彼のXYLはスース出身で、Ashがスース在住中に知り合ったとのこと。彼女の両親は現在もこの町におられるので、140kmも離れたスファックスから3V8SSのあるスースまでAshが頻りに来るのを容易にしているようです。



ていました。後でAshから、彼らはチュニジアでも最も優秀とされる高校の学生だと聞きました。アラブ語やフランス語は生活語。その上、英語があつて、あれだけ話せるのは大変な驚きでした。旧市街地を離れ、遅い昼食をイタリア・レストランで頂きました。やはり近いだけあってイタリア料理店やピザの店をチュニジア中で見かけます。食後は、あちこちへ連れて行ってくれました。Ashが数年住んだというだけあって、町の様子を本当に良く知っています。彼のXYLはスース出身で、Ashがスース在住中に知り合ったとのこと。彼女の両親は現在もこの町におられるので、140kmも離れたスファックスから3V8SSのあるスースまでAshが頻りに来るのを容易にしているようです。

4日目

Ashの運転する車で、朝からスースから最後の訪問地スファックスへの移動です。その途中、巨大建造物を見学するためエル・ジェム (El Djem) に立ち寄るとAshが計画を立てていました。ローマ帝国の中で最も反映した都市のひとつシズドラがこのエル・ジェムにあったため、2世紀にここにコロセウムが建設されました。実はチュニジアには25ものコロセウムが建設されていたのですが、ローマのものも含め、エル・ジェムのコロセウムの保存状態がもっとも良いとのこと



です。以前、シシリーを訪れた際、ギリシャ神殿が本家ギリシャよりシシリーに多くあると聞いたのを思い出しましたが、おかげで訪問者が殆どないコロセウムを自由にゆっくりと見て回ることができました。150m×124mの広さ、高さは36m、アリーナの直径は65mもある大きなものです。この施設は今でも年に数回イベントに利用され、数万人の収容能力があるそうです。コロセウムを後にした車は最後の訪問都市スファックスに向かって走り出しました。オーブ畑に挟まれた片側2車線の高速道路を時速100km以上で走ります。スファックスに入るとすぐにホテルでチェックインを済ませ、この街の旧市街地に向かいます。もう夕方近くで、月曜日は殆どの店が休みということもあり、旧市街地の探索は短時間ででき、ゆっくりとミントデーでゆっくりした時間を過ごしました。

夜には特別なイベントが用意されていました。Ashが彼の自宅に招待してくれ、彼のXYLの手料理でもてなしてくれるというのです。その日は、1月9日。それから20日には出産予定日を迎える彼のXYL。大きなお腹で大変だろうと心配をしましたが、いろいろなチュニジア料理を用意してくれ、お陰さまで食事はもちろん、食後も楽しい時間を彼の家で過ごすことができました。夜も更けてからAshがホテルまで送ってくれ、ホテルの前でAshとはこの旅での別れになりました。



5日目

Ashがチュニスまで送ってくると言ってくれていたのですが、スファックスからチュニスまでは鉄道があることが判り、僕らの希望でチュニスへは列車で移動することになりました。幸いホテルが駅に近かったので、朝食を終えると散歩を兼ねて駅へ向かい、午後2時頃の列車の切符を購入。ホテルに戻るとチェックアウトを済ませ、昼食までの間はスファックスの町の中心部を歩き回ることになりました。

いよいよ駅で列車を待ちます。完全座席指定の特急列車は早朝に一本あるだけ。予約をした急行のような(?)列車が入って来たのですが、座席指定のようなものが切符に書かれているのに、その列車には車両番号もなにもないのです。取りあえず乗ってみました。お世辞にもきれいとは言えない座席には番号もありません。どうやら、全車自





由席のような雰囲気です。取りあえず座ることができたので、一安心。この列車はチュニジアの主要都市を結ぶ列車であることから、その後 Karen はこの列車のことを「チュニジアの新幹線」と呼ぶようになりました。でも、その言葉から皆が想像するものには遠く及ばないような列車でした。車窓からの景色を写真に収めようとしても、窓が汚れていて自動焦点がその汚れに合ってしまう始末です。この列車はスファックスよりかなり南から来た列車のはずなのにスファックス到着時刻は予定から大きく離れていました。ですからチュニス到着は予定通りだろうと信じていたのですが、チュニス近くになり速度を落としたり、止まったりとだんだん怪しくなりました。結局30分以上遅れてチュニスへ到着。小雨の中、荷物を持って10分ほど夜の人ごみの中を地図を頼りに歩いて、数日前に過ごしたホテルに戻り着きました。

6日目

ここからは特に予定がありません。やはり最初は有名なバルドー博物館、とチュニジアで初めて乗るタクシーで向かうことにしました。チュニス空港に最初到着した際に僕ら二人だけでタクシーに乗ることを Ash が心配して迎えの人まで準備してくれたものですから、二人でタクシーで博物館に向かって大丈夫？と正直なところ、タクシーに乗ってからも落ち着きませんでした。ホテルから博物館へ還回していないか、ちゃんとメーターを作動させているか、深夜メーターにしていなくて等々、収集した悪タクシー運転手の手口の情報に基づき観察を続けました。あれほど構えていたのに、予定の料金で何の問題もなく博物館に到着。一安心でバルドー博物館を見ることができました。



この博物館の建物そのものがオスマン帝国時代に宮殿であったため、建物自体の装飾や漆喰も興味あるものです。

また、展示物は先史時代に始まる広い時代を網羅し、特にローマやキリスト教時代のモザイクの収集では世界最大級と言われます。また、保存状態がよいことも大きな特徴です。モザイクに特に興味のある方にとっては時間がいくらあっても足りない博物館でしょう。

トリップアドバイザーで Karen が調べると、チュニスで最も人気のあるレストランが旧市街地北端のカサブ広場近くにあるというので、そこへ昼食に出かけることにしました。今度は安心してタクシーで向かい、そのレストランがあると思いきエアラを歩き回ったのですが、見つかりません。二人が場所を探していると思えたのか、ある人が近づいて来たので、そのレストランの名を告げると、そこから100m くらいの場所まで連れて行ってくれました。でも、ドアにも建物にもレストランの名はありません。それにドアにも鍵が掛かっている開きません。ドアを開けようとして数十秒した頃でしょうか、ドアが開き顔を出した若い男性にレストランの名を尋ねると、そこがそうだというのです。そこへ連れて行ってくれた彼は手を出してチップを要求。いくらかのお金を彼に渡し、そのレストランに入ることができました。

そこは重厚な家具を配置した高級そうな雰囲気のレストランです。少し遅めの昼食の時間でした



が、数組の人達が食事をしていました。だれもがビジネスマンの昼食ミーティングらしくスーツとネクタイをした白人で、ジーパン姿は僕達だけでした。さすがにチュニスで一番とトリップアドバイザーで言われる通り、料理もサービスも申し分ありませんでした。ここで初めて地元ワインを味わいましたが、このワインからもやはりイタリアとは海一つ離れただけだと感じました。



このレストランからホテルまで歩いて戻るには、旧市街地を縦断しなければなりません。いろいろな店を覗いたり、値切りながらちょっとした買い物をしたりしながら、旧市街地を通りぬけたところに、スーパーマーケットを見つけました。チュニジアで味わったものの中で気に入ったものの材料を仕入れたらして、僕達の好きなスーパーマーケットショッピングを堪能して、チュニジア最後の日が暮れました。

この旅の最後の日

ホテルでの朝食でのこと。Karen がパフェの多種類の食べ物の中に小さなケーキのようなお菓子を見つけ、ホテルの人にどこで買えるかを尋ねてたのです。空港へは午後2時頃に出発すれば十分。早速、そのお菓子を買いに仕掛けたのですが、30分走っても着きません。どうやらタクシーの運転手も判らなくなった様子。お店の電話番号を彼に渡すと早速お店へ電話をして場所の確認。それからも、ひどい渋滞の中を走ること10分。やっとお店に到着すると、そこにはかわいいお菓子が



一杯。気に入ったものを購入して待たせてあったタクシーに戻ると、その運転手曰く、そんなものならホテルから歩いて10分くらいのところにあったのに。お菓子の価格と、タクシーの料金と同じくらいになっていました。



おわり



ハビーブ・ブルギーバの像
チュニジアの英雄。彼の名の通りがどの都市にもある

Newsletter
<http://ji3zag.net/html/nl.html>
 会報を自由にダウンロードすることができます

Web: <http://ji3zag.net/>

Rollcall
 Every Saturday 00:00UTC @21.370MHz

毎月のミーティング
 at International House Osaka
 毎月第2金曜日